

『古代寺院伽藍配置の意義—観世音寺式・法起寺式伽藍配置をとる寺院とその展開—』

要 旨

貞清 世里

寺院は、寺の本尊を祀る金堂、釈迦の骨である舍利を安置する塔、経を講じる堂である講堂を中心として、僧侶の居住する僧房、鐘を懸ける鐘楼、經典を収める経楼などの建物によって構成される。わが国では多くの古代寺院が、飛鳥寺式伽藍配置、四天王寺式伽藍配置、薬師寺式伽藍配置、川原寺式伽藍配置、観世音寺式伽藍配置、法起寺式伽藍配置、法隆寺式伽藍配置など、代表的な寺院の名前を標識名とする伽藍形態をとっている。いずれの配置も、南に門（中門）を配し、両妻からのびる回廊内に金堂、塔、講堂などの主要な建物をおき、それらの建物の並び方や数によって伽藍配置として区別されているが、それぞれの伽藍配置のもつ意味や思想についてはあまりよく知られていない。

本論は、古代寺院伽藍配置における金堂のとり方位とその意義に着目し、一塔一金堂式で回廊内の東に塔、西に金堂を配し、金堂が東面する観世音寺式と、南面する法起寺式をとる寺院について、主として国分寺建立段階までの時期を対象に改めて全国的に集成し、その特徴・性格の比較検討を通して、伽藍配置の変遷とその意義を再考することを目的とする。

本論は6部構成とした。第1部では、わが国への仏教伝来から寺院造営、国分寺建立にいたる流れを踏まえ（第1章）、中国、韓半島とわが国の古代寺院の伽藍配置について先行研究を整理し（第2章）、本論の目的と問題の所在を明らかにした（第3章）。第2部では古代地方支配における寺院の役割について、官衙・城柵との結びつきを中心に言及した（第1～3章）。

第3部「伽藍配置の分布と展開」では、観世音寺式、川原寺式、法起寺式伽藍配置をとる寺院について日本全国の寺院を集成し、その分布や特徴などから各伽藍配置の性格を検討した。観世音寺式をとる寺院は、観世音寺や多賀城廃寺をはじめとして全国に15か寺が分布する。その特徴として、大宰府、多賀城などの官衙・城柵に付属するものがあり（観世音寺、多賀城廃寺・郡山廃寺）、西日本ではその多くが古代山城や、総領（大宰）が置かれ管轄した地域に分布すること、大津京を守護するようにおかれたこと（崇福寺、穴太廃寺）、のちに列島南北端の薩摩国分寺や秋田城付属寺院、堂の前廃寺が観世音寺式を採用することなどが挙げられる。観世音寺式は、天智朝に仏法によって首都を守護し、国家の東西南北端におかれた鎮護国家的性格を付与された伽藍配置であることを明らかにした。観世音寺式寺院の本尊については、廃寺が多く不明な点が多いが、不空罽索観音菩薩であったと考えられる（第1章）。

続いて、先行研究によって観世音寺式の祖型と考えられている、一塔二金堂式で回廊内の西金堂が東面する川原寺式伽藍配置をとる寺院について集成・検討を行った。その結果、この形をとるものは川原寺のみで、川原寺式をとる寺院として理解されてきた南滋賀町廃寺の伽藍配置は、川原寺式の西金堂を東西棟にした形であることから、法起寺式の祖型と考えられることを指摘した（第2章）。

さらに、法起寺式をとる寺院を集成し、60 か寺を確認した。法起寺式寺院は爆発的に寺院が増加する 7 世紀後半以降において全国広範囲に分布することが知られていたものの、先行研究では各地域や出土瓦による分析が中心で、全体を通した検討はあまり行われていなかった。本論での新たな集成をもとに法起寺式寺院全体を検討した結果、法起寺式とされる寺院には、法起寺式、推定法起寺式、講堂の南に金堂が配されるもの、講堂をもたない可能性があるものに大きく 4 分類できることを示した。加えて法起寺式寺院の金堂基壇寸法は、吉備池廃寺や飛鳥の主要寺院、観世音寺と比較すると、その平均値がより正方形に近い傾向が認められた。また分布の特徴としては、関東以南の広範囲に長期間みられることが挙げられ、氏族による造寺活動や各地の勢力に採用されるもの（高麗寺）や、地方官衙と一体となって整備されたもの（弥勒寺）、国分寺で採用する事例（備後国分寺など）があり、その様相は多様である。

法起寺式寺院の本尊については、先行研究で南面金堂の方位性から釈迦如来が考えられているが、法起寺の金堂本尊は弥勒菩薩であり、本論で集成した寺院からも対応関係を見出すのは難しい。信仰面の手がかりの一つとして、法起寺、佐野廃寺、備後上山手廃寺が尼寺とされていることから、ほかにも尼寺が含まれている可能性が指摘できる（第 3 章）。

続く第 4・5 部では国家政策と寺院との関わりについて検討した。国土防衛との関わりとして、肥後地域における古代山城と寺院分布（第 4 部第 1 章）、南海道における官道と法起寺式寺院の分布を例に考察した（同第 2 章）。仏教政策面からは、「大寺」制について、一切経の写経や国家による読経などの行事が大寺とされた寺院で行われ、平城京遷都時期には鎮護国家的儀礼も行われていたことが先行研究で指摘されており、観世音寺式の成立にはこのような背景が影響した可能性を論じた（第 5 部第 1 章）。加えて、護国經典導入の流れや、国分寺にも観世音寺式、法起寺式の採用がみられることなどから、国分寺建立段階においても金堂のとり方位による伽藍配置の区別・採用が行われていた可能性を指摘した（同第 2 章）。また、761（天平宝字 5）年に戒壇がおかれた下野薬師寺と観世音寺について、一連の地方寺院対策によるものとして先行研究で解釈されるが、下野薬師寺が三金堂式の伽藍を採用し寺名も薬師寺としたことは、東方守護を目的として設立されたことに加え、教義や本尊によってその役割が分担されたもので、観世音寺の伽藍計画も踏まえた伽藍配置の区別・採用が行われていたためと想定した（同第 3 章）。

第 6 部「伽藍配置の意義」では、第 1～5 部の検討成果を踏まえ、観世音寺式、法起寺式の採用・分布の違いから両伽藍配置型式の性格を検討し、古代寺院における伽藍配置型式の展開および伽藍配置の意義について論じている。観世音寺式（東面金堂）は川原寺式の流れをくみ、日本列島の東西南北端に位置する寺院にみられることから、国家の地方支配に密接に結びついた鎮護国家的思想が付与された伽藍配置で、金堂本尊は不空罽索観音菩薩像といえよう。一方、法起寺式（南面金堂）は、南滋賀町廃寺の流れをくみ、主に地方寺院において全国的に広く長く採用されていることが改めて明らかとなった。このような官的要素や護国思想に限らず、現世利益や地域・民族的なつながりに寄り添った汎用性の高さからは、在地的な仏教信仰の基盤として、安置された本尊を礼拝・供養することがより容易な南面金堂が生じたことが想定できる（第 1 章）。

以上から、川原寺式から観世音寺式、南滋賀町廃寺式から法起寺式への伽藍型式変化が想定でき、これらの展開は、飛鳥寺の伽藍配置の一部を抽出する流れとして整理することが可能であると論じた。

すなわち、飛鳥寺式から中・西金堂・講堂・塔・中門を抽出すると、一塔二金堂式の回廊内の西に金堂を配する形となり、川原寺式となる。その西金堂が南面すると南滋賀町廃寺式、さらに中金堂を省略し、金堂と塔をそれぞれ一つ配する形として、金堂が東面する観世音寺式、南面する法起寺式へと展開する。東西反転に同様に、一塔二金堂式の回廊内の東に金堂を配する形として東金堂が西面、南面するものに分かれる。さらに中金堂を省略し、金堂が南面する法隆寺式、西面する野中寺式へと展開する。飛鳥寺式の中金堂・講堂・塔・中門を抽出すると定林寺式、四天王寺式（同講堂と金堂の区画を省略）となる。同様に、西金堂・東金堂を塔に置き換えた形として、大官大寺式、薬師寺式（同区画を省略）となる。造営主体が重要視する信仰や教義、金堂のとり方位や仏舎利への信仰などに合わせた伽藍配置の成立・採用の流れとして、理解が可能であることを明示した（第2章）。